

神の愛を信じて

深谷与那人

クリスチャンとして生きていて、本当に良かったなと思うことのひとつに、死んだ後のことを、明確に語れるということがあります。肉体が減びても、霊は減びません。イエス・キリストを信じることによって、天国の扉が開かれ、永遠の命が与えられるのです。これは、今までも、これからも、そして、現代社会を生きている私たち一人ひとりにも、変わることはない聖書を通して聖霊が語っている真理です。この信仰によって得られる平安は、他にありません。

敬愛する、瀬野行平兄、松尾真芳姉、瀧川京子姉、立石稔兄、そして不思議な導きで出会った齊藤稔兄をこの一年で天に送りました。また何よりも、必ず故人の思い出を、このしゃろんのぼな誌に寄せてくださったっていた、山根芳枝先生が召天され、今年からは、天国会員となつて、ついにお名前が掲載される側になりました。

一般の追悼文集は、故人の功績を称賛し、後世に残したい記録が連なるでしょう。しかし、時間は、臨終と弔いのその日で止まったままです。しかしこの「しゃろんのぼな」は、その限りではありません。普通の文集にはない、天国の光が、ちらちらと行間から輝いています。地上から、目に見える形では世を去った方々ですが、いのちがそれで終わったのではなく、天の御国にうつされて、そこからは永遠に、神の愛の中で主を賛美していることを、証しているからです。この人たちの時は、まだ止まってはいなくて、やがて最後の審判という、完全な神の正義が世界を治める時に向かって、備えていると聖書は語ります。

とはいえ、死別の哀惜は簡単には癒えません。イエス様が息を引き取る姿を看取ったマリアたちも、筆舌尽くしがたい嘆きに打ちのめされました。復活の朝を迎えるまでの、数日間は、真つ暗な千年の夜に感じたことでしょうか。その深い闇の刻を、彼女たちは生涯忘れなかつたでしょう。どうして人間は、こんなに小さく弱く、何もできない存在なのだろうかと、死という強敵を前にして誰もが思うものです。神の愛は、その闇の中で私たちを救う光なのです。

神の愛を信じるということは、別れのつらさを乗り越える、素晴らしい力です。神の愛に満たされた命は、見捨てられることがあります。天の故郷を待ち望む人は、「今度は天国で会おうね」と涙の中にも約束を交わすことができます。

この知らせが、今も教会に語り継がれているということは素晴らしいことです。「わたしの愛にとどまりなさい」(ヨハネ一五・九)とイエス様は、すべての人をこの奇跡に招いておられます。